

大安、仏滅、友引などの六曜と立春、夏至、秋分、大寒などの二十四節気とは、昔の暦から来ていて、似た様なものだと思っている人が多いようだが、それは違う。

カレンダーに記されているのを見ると、意味深に感じるかもしれないが、実はこうなっている。旧暦の日付で決まってくる。1月・7月の1日：先勝、2月・8月の1日：友引、3月・9月の1日：先負、4月・10月の1日：仏滅、5月・11月の1日：大安、6月・12月の1日：赤口。他は、先勝、友引、先負、仏滅、大安、赤口の順で巡る。つまり9月19日は旧暦8月1日で友引だから、20日が先負、21日が仏滅、・・と来て、今日24日は先勝となる。

つまり六曜は自然との関連はなく、人為的な決まりごとである。二十四節気が太陽の運行から決まっていて、極めて自然の状態を反映しているのとは大違いである。

六曜について、いくつか事典を調べてみよう。「六曜：江戸中期から使用され始めたもの」。「友引：①陰陽道で凶禍が友人に及ぶとする方角。②六曜の一。何をしても勝負がつかないとする日。朝晩は吉、昼は凶だが、のち、①と混同されこの日に葬式を出すことを忌むようになった」。

つまり六曜そのものの決まり方が自然と関連ないだけでなく、例えば「友引」を見てみれば、もともと、「何をしても勝負がつかない日」であったものが、「凶禍が友人に及ぶとする方角」と混同され、凶禍が友人に及ぶとする日」となっているわけだ。

そんなものに私たちは拘束され、他の都合が良くても、お葬式を避けて、不便を被っている。天候などに左右されるならば仕方ない

だろうが、観念的なものに私たちは不自由にさせられている。

六曜への私たちの呪縛というのは、迷信へのものというより、言葉への呪縛である。迷信もまた、言葉の重なりではあるが、六曜の場合、もっと単純な言葉への呪縛である。だから「大安」「仏滅」「友引」という解釈を日常に引き付けるに分かりやすいものが一般に気にされている。「4号室」を避ける程度のものである。

少し趣は異なるが、例えば、不吉な夢を見る。例えば、自分が子ども等と共に交通事故にあう夢。夢でなくとも、こう書く方が不吉だと感じるだろうか。いずれにしる、私はこういうものに左右されたくない。嫌な気持ちがあるから、自分からこう書くことは通常はしないし、こうした話題を持ち掛けられるのは気持ち良いものではない。しかし、そうしたものに左右されるのは御免だと思う。例えば、こういう夢を見たり、そうした想いが去来したりした時にも、私は予定していた子供たちとの車でのお出掛けに出かけて行く。気にする想いをきっぱりと断つ。未来を暗示する神のお告げだとは思わない。注意しろというお告げだと、積極的に思い直すことはある。私は神を信じていないのではなく、人々が勝手に作り出している虚構の「神」を拒否しているだけである。

自然の中に生まれ、自然に育まれている私たちにはもっと大切にすべき、自然と共生する知恵が具現した伝統や風習がある。社会の中で生きるしかない私たちには、もっと大切にすべき、他人への気遣いがある。もっともらしい虚構の言葉から解放されて、知恵がこもった新しい言葉を作り出そう。(2009年9月24日)

【雑想】友引・大安にお葬式を

齊観堂鍼灸・氣功治療院 鈴木齊観